

なぜ高卒女性で初職非正規リスクは高まったのか

——SSM1985-2015 を用いた時点間比較分析——

桃山学院大学 阪口祐介

1 目的

1990 年代中頃から「学校から仕事への移行」が不安定し、初期キャリアにおける非正規リスクが拡大している。こうした状況を受けて、多くの研究が、その実態や背景、出身階層や学歴によるリスクの階層差について明らかにしてきた。ただ、ジェンダー差に焦点を当て、リスクの階層差の長期的趨勢を探究する試みはあまりなかった。そこで、本報告では、1985 年から 2015 年までの 4 時点の SSM 調査データを用いて、いかなる社会層において初職非正規リスクは拡大したのか、それはなぜかを明らかにする。結論を先に示せば、1990 年頃から、特に高卒女性において初職非正規雇用リスクが高まっており、女性においてリスクの学歴差が拡大している。では、それはなぜなのか。本報告では以下の 5 つの説を検討する。①高卒女性における正規事務職というルートの縮小。②大卒女性の新卒労働市場の相対的な改善。③高卒女性における学校経由の正規雇用へのルートの縮小。④高卒女性における「間断からの非正規」というルート。⑤高卒女性のジェンダー意識の保守化。

2 方法

使用するデータは、SSM1985、1995、2005、2015 である（SSM2015 については ver070 を用いる）。はじめに、初職入職コーホート（1955～2015 年）別に、出身階層および学歴と初職の関連性を示し、90 年頃から初職非正規リスクの階層差（出身階層および学歴）がどのように変化したかを男女別に確認する。次に、高卒女性の初職非正規拡大の要因として上述の 5 つの説をデータから検証する。

3 分析結果と結論

第一に、初職非正規リスクの階層差の趨勢については次の傾向が確認できた。出身階層は、男女ともに初職非正規リスクにあまり影響を与えておらず、出身階層によるリスクの差が変化した傾向はみられない。学歴については、男性では学歴間で初職非正規リスクは拡大しなかった一方で、女性では、90 年頃に入職したコーホートより、高卒のリスクが急激に高まり、学歴間のリスクの差が拡大した。

第二に、高卒女性の初職非正規拡大の要因については次の結果がみられた。①80 年代以前に入職した高卒女性で非常に高い割合を占めていた正規事務職が、長期的に大きく減少しており、非正規の事務職や販売職が増加した。これは、どの時代でも、5、6 割が正規ブルーカラーに就職している高卒男性とは大きく異なる傾向である。②80 年代まで大卒女性は高卒女性に比べて、大企業ホワイトカラー職に就くチャンスが低かったが、90 年代に入ると、その傾向は逆転し、大卒女性の新卒雇用が相対的に改善した。③高卒女性にとって正規職に就くチャンスを高める学校経由の就職が、90 年代に入ると大きく縮小した。④90 年代以降、間断からの非正規というルートは高卒女性で最も顕著であった。⑤若年女性の性役割分業意識の学歴差が近年拡大しているという傾向はみられなかった。

学校から仕事への移行の不安定化のなかで、初職非正規リスクは高まっていったが、リスクはどの社会層にも普遍的に拡大したわけではない。女性において学歴によるリスクの階層化が進行したのである。その背景には、下記の需要側の要因が関係している。90 年代中頃から、IT 化や高学歴者への代替といった構造的な変化のなかで、高卒女性の正規事務職が大きく減少し、それに伴って、需要と供給をつなぐマッチングとしての意味を持つ学校経由の就職も縮小した。他方、ジェンダー平等化政策などの影響で、大卒女性の新卒就職が相対的に改善したことも一因にあると考えられる。

付記：本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。